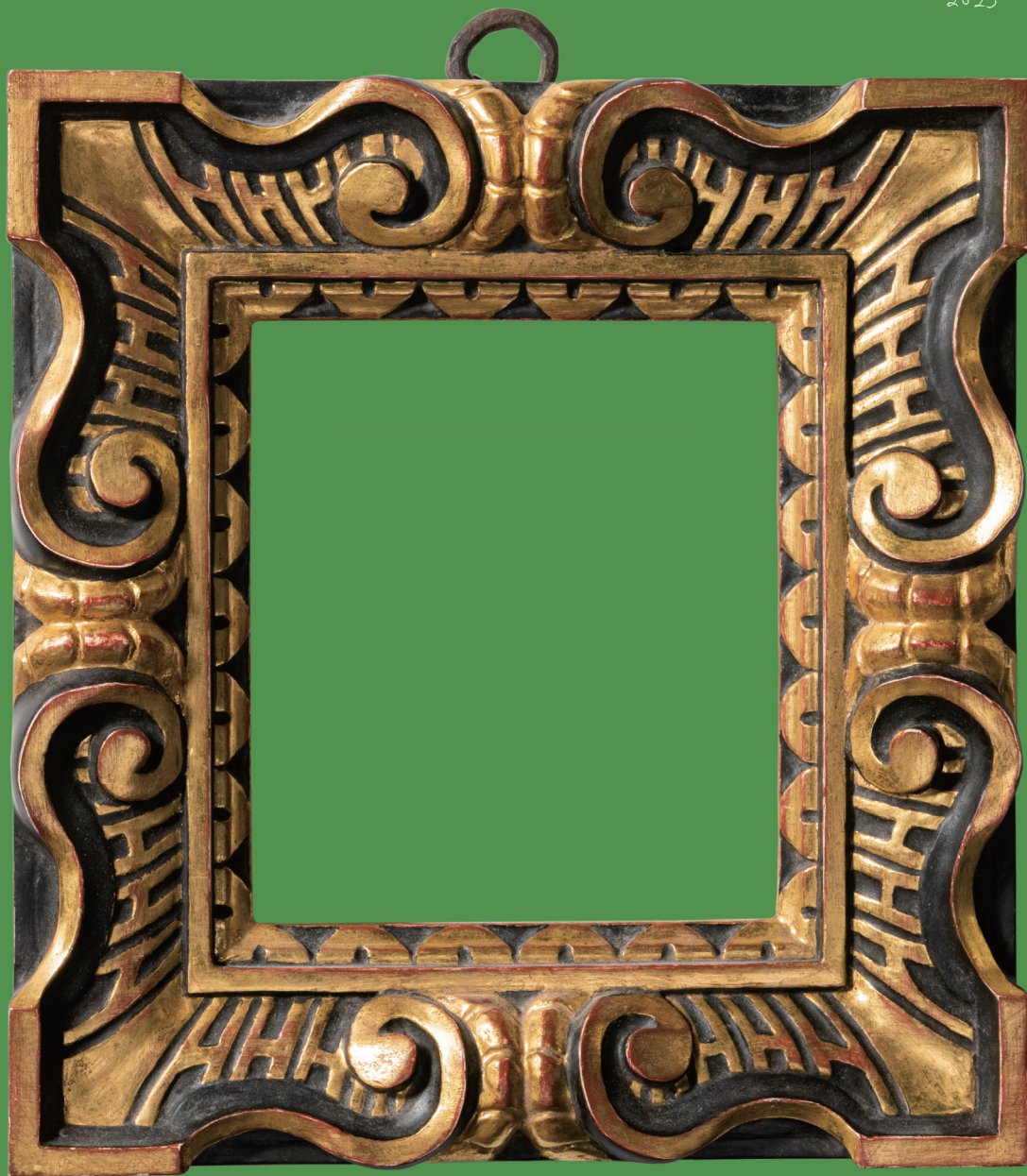


# 禅の友

ZEN  
no  
Tomo 9  
2023





ご本山だより  
大本山永平寺【眼蔵会】

大本山永平寺  
福井県吉田郡  
☎〇七七六・六三・三一〇二



道元禪師どうげんぜんじの著作の中でも最も有名なものが『正法眼蔵』です。九十五巻にも及ぶご教示は格調高い文章と深遠な内容にて著され、現在でも僧侶だけでなく多くの方に読まれる聖典です。

今でこそ、書籍やインターネットなどですぐにその教えを学ぶことができますが、実は明治になるまでは誰もか読めるものではありませんでした。それ以前は、永平寺に保管されていた『正法眼蔵』は本当にわずかな人しか閲覧することができず、その人たちが書写したものが全国に広まりました。しかしそれらも拡散していく中で誤字脱字が増え、散逸されることもありました。その為、当時の僧侶は不完全な状態の『正法眼蔵』を参究さんくわうをしていたのです。

数百年の念願が叶ってようやく本山版の『正法眼蔵』が印刷されたのは江戸時代の終わりのことでした。そして、明治三十八年、六十四世森田悟由もりたごゆ禅師の発願により第一回眼蔵会が開かれました。丘宗潭あきむね老師を初代講師に招き、

七十日間にわたり『正法眼蔵』を参究するという内容でした。森田禪師は、今こそ道元禪師の教えを正しく学び、宗風を再び興そうとお考えになったのです。当時の永平寺の修行僧に加え、全国各地から六十五名の僧侶が参加しました。現在は交通網が発達し、短時間で移動ができますが、当時はそのようなものはありません。苦勞をしながら何日もかけて移動をし、やっとの思いで永平寺までたどり着いた方も多かったでしょう。道元禪師の教えに触れたいという思いはどれほどのものだったのでしょうか。また、『正法眼蔵』を深く学び、そこで得た悦びも何物にも例えられないほどのものであったことでしょう。

その眼蔵会が九月厳修げんしゆされます。今年で一一七回目を迎えます。今回も高名な講師のご指導のもと、五日間道元禪師の教えを参究していきます。道元禪師の教えに触れたいという思いは一〇〇年以上たった今でも変わらなずにいます。



ご本山だより

# 大本山總持寺

## 【両祖忌】と【秋彼岸】

大本山總持寺

神奈川県横浜市

☎〇四五・五八一・六〇二一



道元禪師



瑩山禪師

暑さもようやく和らぎ心地よい風を感じられる季節になりました。秋が深まると日が暮れるのが早くなるため、夜が長い月という「夜長月」が略されて九月の異名が「長月」となったそうです。樹木に囲まれている總持寺でもその木々の間を通ってくる涼風が感じられるようになりました。

九月は曹洞宗では特に大切な法要が営まれます。それが「両祖忌」なのです。両祖とは「お二人の祖師」ということです。そのお一人は道元禪師です。

道元禪師は中国（宋の時代）に渡り禅の教えを学び、帰国後京都、のちに永平寺においてその教えを広めました。もうお一人は瑩山禪師で道元禪師から四代目の方で徳島県海部郡の城満寺や石川県羽咋市の永光寺そして当時石川県にあった總持寺を開き道元禪師か

ら継承した正法を広めると共に、沢山の弟子を育成しました。その教えはその多くの弟子によって全国に広がり、現在の曹洞宗の基盤となったのです。この大切な祖師方の遺徳と御恩に感謝して営まれるのが九月二十九日の「両祖忌」なのです。

また九月は秋のお彼岸でもあります。ご先祖さまを供養すると共に自分自身に反省を加え、六波羅蜜とされる六つの善き行いの種蒔きをする修養期間なのです。

その六つとは、布施（施し）、持戒（規律を守る）、忍辱（寛容）、精進（努力）、禪定（心を静める）、智慧（正しい判断力）です。これらを実践し、悩みの多い現実の世界（此岸）から煩惱から解放された世界（彼岸）へ向かう為に精進したいものです。

選・坊城俊樹

天下取る貌して蟾せんの罷まかり出づ

島根県 藤江 堯

評 蟾とはヒキガエルのこと。何やら天下を取る役者のように土や草の中から罷り出てきた。蟾は夏になっていろいろな虫を食べたりしていよいよ大型で肥えてくる。そののっそりと歩く面構えは時代劇に出てくる武士が大泥棒のような貴祿。

一閃の火より始まる大花火

島根県 金山 陽

評 これはかなり大掛かりな花火大会の模様であろう。そういう場合まず最初にヒュルヒュルと大会の始まりを示す狼煙のようなものを打ち上げる。そしてその後から大輪の花火たちが夜の大空へ大輪の花を咲かせる。その映像が見えてきた。

◆ 母も逝き妹も逝きたる夏座敷

千葉県 高橋 秋市

◆ 低く吊る胸の風鈴文士村

千葉県 長澤 きよみ

◆ 紫陽花の鏡にうつる美容院

長崎県 崎田 定雄

◆ 向日葵やゴツホ来さうな浪江町

福島県 大槻 弘

◆ 園長の熊は体養夏に入る

和歌山県 田崎 よし子

◆ 夕菅の花に気高さものの影

埼玉県 野原 孝子

◆ 逆縁の庭に散り行く沙羅の花

秋田県 高橋 カツ子

◆ 格子窓に居並ぶ遊女七変化

大阪府 岡 恭介

◆ 滴りの狂ふことなき狭間か

鳥取県 眞山 博充

◆ 連山をすつぽり包み男梅雨

滋賀県 五十嵐 勉

選者吟

恋の色着て青山のあつぱつぱ

俊樹

作句小見 「あつぱつぱ」は昭和の時代によく見かけたウエストを締めないワンピース。昔は母が着ていたことを思い出す。最近も東京の青山あたりでもそんな洋服が若者に流行っているらしい。しかしその原色の水玉模様はまさに恋めく乙女たちの色なのである。

選・長澤 ちづ

さへづりも地鳴きもしげさかはらひは車  
月の真昼間をちこちに鳴く

広島県 徳永 進一郎

評 三句目「かはらひは」は河原鴉のこと。旧仮名遣いがやさしく息づいている。繁殖期の「さへづり」に対して通常の鳴き方を「地鳴き」というらしい。作者の周辺はまだ豊かな自然に恵まれているようだ。

空青し見知らぬ町を自転車に走れば袋小路に出たり

山口県 濱田 道子

評 初句切れが効果的な一首である。空が青かったから目的もなく自転車をこぎ出して……という因果関係がさり気なく表現されている。

◆ 竿先に確かな鼓動残しつつ鮎は玉響宙に煌めく

鳥取県 眞山 博允

◆ お茶と言へばペットボトルが全てだと思ふ世代にも八十八夜

島根県 横山 麩吾

◆ 夫が逝きわたしもすぐにと思ひしが今日二十三回忌の香を手向けぬ

静岡県 杉原 民子

◆ 背中まで泥はね帰りし遠き日の梅雨の下校の葦草履かな

三重県 西村 廣視

◆ 水無月の湿りのなかを確実に太りてゆきぬ庭の青梅

埼玉県 白藤 巳玲

◆ さんざめく川辺の宿の灯も消えて瀬音の高く夜も更けにけり

鳥取県 徳本 義則

◆ 過疎に棲み河鹿の淵に毛針うつ撓む竿引く力わすれず

岩手県 関合 新一

◆ 朝の雨はれて明るむ浦に告ぐるウニ口開けの報の声高く

岩手県 阿部 照子

◆ コロナ禍のマスク探しを思ひつつ玉子求めて今日三件目

北海道 加藤 智子

◆ 玄関に初夏の水打ちて待つ久々に友が訪ねて来れば

東京都 長谷川 瞳

選者詠

戦闘機は自由のための翼として詩の言葉にて

兵器欲る人

ちづ

作歌小見

阿部さんの作の「ウニ口開け」とはウニ漁解禁のこと。地域独特の言葉が生き生きと伝わる。鳥インフルエンザ流行で大量の鶏が殺処分され卵の品不足が続く。コロナ禍のマスク不足と卵の品不足の対比がユニークな加藤さん作も興味深い。